

「日本のこころ」の源流を探る

社会や世界に次の世代が自己肯定感をもって立ち向かうために

はじめに

これから社会人となる学生、すでに社会人となっている教育関係者や企業人等の多くは、旧世代の価値観との断絶など構造的な敗戦後の生活・社会環境の変化や知育・ロゴス偏重の学校教育の中で、人間としての真の生き方を学ぶ機会が少なく、自信をもって社会に立ち向かうこころの準備が十分に整っているとは言えないように感じます。

自己肯定感を養うためには、楽しみながら学びアウトプットで自信をつけさせるPBL（プロジェクト・ベースド・ラーニング）等の各種教育手法の導入も必要ですが、社会や世界に立ち向かう真の自信は、根源的にはやはり世代を超えて継承されるべき民族の文化や人類の智慧を身体全体で習得し、自らのアイデンティティに確信をもつことでしか生まれないのではないのでしょうか？

その必要性を直観する若い世代からは、歴史的に築かれてきた「日本のこころ」※の根源を学び直したいというニーズが、澎湃として高まりつつあると感じられます。

※「日本のこころ」とは、小我を離れ大我（真我）を知るこころ（岡潔）。

小さな自我を離れ、周りの環境や人間・社会・世界と一体不可分の自己を知る大きなこころ、日本の長い歴史と文化に根差すものであるが、人類的普遍性を持ち、世界中の人々と共鳴し合い、共有できるもの。

これに対応する学校や社会での教育・研修のカリキュラムは十分開発されておらず、リカレント教育、リベラルアーツ教育、道徳教育の一環として位置付け、日本社会としてのSDGs実現の基本ビジョンを考える機会にもなることを期待して、試みのカリキュラム案・教材案を作成してみました。

一応、毎回2時間程度、十五回の研修を行う前提で、その際の基本テキストとなるように各回のテーマを下記のとおり構成しました。

- ① 世界が期待する日本のこころとは
- ② 日本のこころを育んだ源流に何があるか
- ③ 地球環境の保全・人類の共生を支える日本のこころ
- ④ 孔孟思想・古学と陽明学から生まれた日本のこころ
- ⑤ 世界が注目するマンガ・アニメの日本のこころ
- ⑥ 眞のサムライとは？剣道・弓道・合気道に見る武士道のこころ
- ⑦ 明治維新の立役者、西郷隆盛・勝海舟・山岡鉄舟の生きざまを支えたもの
- ⑧ 聖徳太子の和の精神から世界への貢献を考える
- ⑨ 匠の道、茶道、書道、日本美術等から日本のこころを探る
- ⑩ 幕末から明治につながった実学と平等・民権の思想
- ⑪ 世界に貢献する日本型産業の精神の源流（石田梅岩、二宮尊徳など）

- ⑫ グローバル化時代における日本語の大切さ
- ⑬ 世界に求められる日本型リベラルアーツとは
- ⑭ 人工知能（AI）の時代と人間力
- ⑮ これからの世界・社会に立ち向かう日本のビジョンを考える

研修は、参加者の主体的・自主的な学習（体験学習を含む）の場とするため、この教材を基本に、事前に指定した資料（書籍等）を読んだ上で、ゲストを交えた意見交換に参加し、各人の自己啓発に資することを目的に実施され必要があります。参加者の「自調自考」の機会となることを目指し、この教材もそのためのキッカケ（考えを深める機会）として利用されることを期待したものです。

（ ）はゲストとして参加者との対話をお願いしたい候補案（敬称略）、「 」は参考図書の候補案で、本稿作成の最初の段階のイメージ案です。

内容の骨子（人名尊省略）

第一回 世界が期待する日本のこころとは

戦後の日本で、アジア・アフリカなど発展途上国の人達のハートを捉えた「ホズミ・スピリット」とは？ 工業大学まで創設しタイの産業発展の基礎を築いた元日本留学生達の事例研究から、彼らの魂を揺り動かした穂積五一の精神を知る。

長年日本に滞在し世界と日本を繋ぐ色々なプロジェクトに関与されているスリランカからの元日本留学生モンテ・カセム至善館大学院大学学長（元立命館アジア太平洋大学学長）の具体的な活動から、私達がこれから何をどのように為すべきかのヒントが見えてくる。

その他、世界からの元日本留学生OBの人達からも、具体的な事例を挙げて世界から期待される日本のこころを知る。

第二回 日本のこころを育んだ源流に何があるのか

二宮尊徳は「神仏儒正味一粒丸」と言い、勝海舟は「剣術と坐禅」と言う。日本のこころは、この神・儒・仏の三つの要素の優れたところを、各人の主体的な価値判断で融合して形成されてきた、と見ることができる。日本人の大多数は、「あなたの宗教は」と聞かれれば、「自分は無宗教だが、神儒仏等の良いところを取った日本のこころがその代わりとなっている」と答えるのが正解かもしれない。まずは、禅、古神道の自然観や美意識、古学・陽明学等の日本型儒

教が融合する日本のこころの在りかを、「禅と日本文化：鈴木大拙」から探っていく。禅とは実践智を学ぶ手法、禅と美術、禅と武士・剣道、禅と儒教、禅と茶道、禅と俳句・・・

第三回 地球環境の保全と人類の共生を支える日本のこころ

地球環境問題は気候変動、砂漠化、海洋汚染等に限られない。ゲノム編集等人間の生命に関わる問題に拡がり、山中信弥教授は下手すると「人類は亡ぶ可能性がある」という。ジェンダー問題も人間の子孫をどのように維持発展させるかと言う生命を繋ぐ社会システムの問題と関係する。日本のこころの生命観はこれらの問題にどう立ち向かうことができるか。

神道の自然感や美意識には宗教という言葉で括れない大切なものがある。グローバリズムが進む中では、日本民族自体も「先住民族」として扱われるのかも知れない。世界中の先住民族の智慧は、人類共通の叡智かも知れず、地球の環境問題はここから解決していくべきものと思われる。地球環境の保全こそ、日本の世界史的使命ではないか。

「シリーズ人体・遺伝子：NHKスペシャル取材班」、「先住民族の叡智：月尾嘉男」

第四回 古学と陽明学からも生まれた日本のこころ

日本で熟成した儒教は、堅苦しい倫理道徳や統治原理（法家の思想）を超えた、気（浩然の気・孟子）や祖先崇拜などの日本人の生活文化に根差した「こころ」の本質にかかわるもの

「大人のための儒教塾：加地伸行」

幕末の古学から水戸学へのつながりは、伊藤仁斎、荻生徂徠、会沢正志斎を経て、福沢諭吉への実学（日本型プラグマティズム）につながるという見方もある「日本思想史新論：中野剛志」

第五回 世界が目にするマンガ・アニメの日本のこころ

「北斗の拳」、「進撃の巨人」等の日本のマンガのリーダーの姿が、何故世界の人々のこころに響くのか、「鉄腕アトム」、「アンパンマン」、「ブラックジャック」、「ルパン三世」がなぜ、世界で受けるのか。そこから日本のこころの在りかを再確認してみる。

第六回 眞のサムライとは？ 剣道・弓道・合気道等に見る武士道のこころ

武道の奥義書には、禅のこころ（柳生新陰流等）、神道のこころ（鹿島・香取神

道流、直心影流等) が示されている。それは戦いへの荒ぶるころではなく、小我へのこだわりを無くした、全てを達観する静かで清明なころ。

第七回 明治維新の立役者、西郷隆盛・勝海舟・山岡鉄舟の生きざまを支えたもの

その世界観、生活観、社会観は、禅や、陽明学、古神道で裏打ちされ、平等観（四民平等）に貫かれた自由自在に働く日本のころがある。伊勢松阪の豪商との交流による視野の広さは別として、激動の幕末から明治まで筋を通して生き抜けたのは、「ただ若い頃からの剣術と坐禅による」という勝海舟本人の言葉の意味するもの 「氷川清話：勝海舟」（高山みな子）

第八回 聖徳太子の和の精神から人類共生への日本の貢献を考える

「和を以て尊しと為す」という太子の憲法一条は、神・仏習合の日本のころの出発点にあり、これからの人類が目指すべき共生社会をリードする世界観（基本理念）に繋がる？

（岡野守也・田中英道）

第九回 匠の道、茶道、書道、日本美術等から日本のころを探る

文学や美術、雅、幽玄、侘び寂び、芸事、匠の技など、日本人の生活や社会の隅々に至るまで存在している日本のころの本質は？（近藤誠一）松尾芭蕉に見る俳句と禅の関係

第十回 幕末から明治につながる実学（プラグマティズム）と平等・民権の思想

福沢諭吉から田中正造につながる四民平等の人間観の根源は？ 富国強兵を目指した明治国家とは別の流れ、一方では自由民権運動に、他方では鉞害等環境破壊防止と人権尊重の流れへ、世界に対しては、国際連盟への人種平等決議提案や植民地解放・アジア会報、独立支援への流れへ、また宮沢賢治はなぜ世界から好かれるのか

第十一回 世界に貢献する日本型産業の精神の源流（石田梅岩・二宮尊徳・渋沢栄一等）

禅と念仏によって、専門修行者の世界から庶民全体に広がった鎌倉仏教の宗教改革は、今日の日本の産業社会を支える日本型マネジメント、企業道徳（武士道、商業道徳）、勤労の精神、ものづくり精神の土台となっている 「日本型資本主義・その精神の源：寺西重郎」

例えば、石田梅岩の心学はCSRの模範と言われる「三方良し」の日本の商業道徳のベースであり、二宮尊徳の農民の主体的努力を導いた地域開発モデルは今や21世紀の地方創生のモデルとなっている。

第十二回 グローバル化時代における日本語の大切さ

日本のこころの根源には国語がある。自国語（漢字かな交じり文）を失ってはノーベル賞も出ず日本に未来はない。国語を失った国（アラビア語と中東諸国、タガログ語とフィリピン、漢字と韓国）の悲劇、日本語喪失の恐れは？

（施光恒）

第十三回 世界に求められる日本型リベラルアーツとは

昨今の理系教育重視・文系教育軽視の方針は由々しきこと。和・漢・アジア・アラブ・西欧等の世界の文化の結節点にある日本に、文学・哲学・宗教・古典等人間の本質を考え、将来の人類社会のあり方を模索する学問の研究・教育センターが今こそ必要なときはない。和・漢（印・アラブ）・洋の古典を総合的に学べる日本型リベラルアーツの再構築を目指す「東京逍遥塾」のケースを知り、将来日本に人材育成も含めたアジア発の人類文化の交流と発展を目指す教育研究センターとしての「アジア・世界文化研究所」の創設を検討する必要はないか（荒木勝）

第十四回 人工知能（AI）の時代の人間力とは

人間のこころは生命現象であり、機械学習ではのり越えることが出来ないもの（直観力、感性、・・・）がある？ 新しい価値を生み出すイノベーションに必要な人間力とは？ 知識や論理（ロゴス）力を育てる坐学だけでなく、実践智と感性・直観力を育てる体験学習が不可欠

「人工頭脳は人間を超えるか：松尾豊」、「A Iに負けない子供を育てる：新井紀子」

第十五回 これからの世界・社会に立ち向かう日本の夢（ビジョン）を考える

人類はアメリカファーストのトランプの夢、一带一路の習近平の夢を超克する新しい世界ビジョンを考える時期に来ている。それらを超克する日本の夢（ビジョン）はどのようなものか？

グローバリズムとナショナリズムの対立、宗教観の相違による対立、一国覇権主義と多国間主義の相克、経済における自由と管理・規制のバランスの喪失、富の集中と格差の拡大等々で混乱する世界に、世界や日本の歴史、祖先の残した智慧を踏まえ、私達はどのようなビジョンを提示することができるのか。

以下、各論の概要（準備中）

I 世界が期待する日本のこととは

日本のことは、これまでも世界・人類に大きな貢献を果たしてきた実績があります。そのことの内容・真髓を探るためには、言葉（論理）による解説だけでは不十分で、体験（感性、直覚）が必要です。現地現物で、頭脳だけに頼ることなく五感を総動員し、全身全霊による理解が不可欠です。世界のための日本のことセンターが、無念夢想で無意識の世界を体験する坐禅を重視し、また学びや研修に際して、坐学だけでなくアウトドアで自然や社会体験から学ぶことを重視しているのもこのためです。

そして、学びのキッカケとしては、色々な角度から世界や社会の現実とその成立（歴史等）を知ることが必要だと思います。

まずは、日本の外（世界）からの視点が、私たちに気づきの出発点を与えてくれます。最初に、日本に長らく生活し、学校で学び、世界との関係で事業を続けておられる方々から、日本のことの本質に迫るお話を聞いて見たいと思います。

1. 「ホズミ・スピリット」の真髓＝日本人（日本の国益）から離れること

戦後の日本で、アジア・アフリカなど発展途上国の人達のハートを捉えた「ホズミ・スピリット」とは？

（以下、講演概要から加除訂正を加える）

1974年急激な日本の経済進出に反発してタイやインドネシアで起きた学生中心の反日運動は、東南アジアを訪問した当時の田中角栄総理に衝撃を与え、日本の各界が対策に追われる事態となった。その解決に官民の要請を受けて乗り出したのが穂積五一であった。戦後日本の産業はアジアで反日の嵐を経験した。その中心には元日本留学生達がいる、彼らは自己利益優先の日本の経済進出に反発し、日本の経済協力も拒絶した。日本政府は困って穂積五一を担ぎ出し、元留学生達とひざ詰めで話し合ってもらった。そこで、わかったのが彼らの本音であった。学生たちの反日の主張は、「日本はタイのためと言いつつ、経済進出の実態を見るとその本心は自国の発展だけではないか」、「日本の経済協力もこのままでは受けられない」と言うもの。「経済協力は、南のためと日本人はいふが、それは日本の利益のためである。援助した日本は富み、それを受けた南は貧しいままである。貿易のアンバランス、紐つきの援助、資源の乱獲、公害の輸出、進出企業における不公平な待遇、人間的侮辱など、経済協力というのは、王道楽土の名の下に満州を侵し、大東亜共栄圏の旗の下にアジア人を殺戮したのと同じ手口の侵略である。経済協力は海老・鯛のエビに過ぎない」というのが彼らの主張だと穂積は語った。（内観録P372）

戦後の日本人のことの浅さを見透かされたと感じた穂積は、タイ側の若者やリーダー（大蔵大臣のソンマイ氏）と会談を重ね、また日本の官民に働きかけて、タイ人による主体的な発展努力を無償で支援する日本側の支援体制を構築する。

具体的には、タイ側が泰日経済技術振興協会（TPA）を創設するに際し、日本側官民は（社）日タイ経済協力協会を創設して、見返りを一切求めずにタイの会館の建設を支援することとした。同協会の理事長には、両国の関係者の強い要請があって穂積が就任した。

そこで打ち出された穂積の方針が、「ホズミ・スピリット」としてタイへの産業人材育成支援の基本原則となり、タイ側から（アジア全体からも）高く賞賛されるものとなった。

支援のあり方等は、相手国民の主体性を常に尊重する。金は出しても口は出さない。タイのためと言いながら、自らを利することが主目的になっていないか常に反省する。

この考えは今日まで貫かれており、その証左として TNI の校庭には穂積五一の銅像が設置されている。

この穂積の考えの基本には、坐禅体験から得たられた無我のころ、即ち自己に拘る小我ではなく、天地万物我と同根という大我のころがあったのではないか。日本人でありながら「日本人を離れる」無我の精神、それが直観的に世界の人に理解されたのであろう。

このことは、穂積が、下記（※）のような張学良と洪沢栄一のエピソードを述べている（内観録 P 89） ことから理解できるのではないか？

※張学良と洪沢栄一の逸話

昭和 4、5 年の満州建国以前のこと、張作霖の爆死事件（昭和 3 年）のあと日本を不倶戴天の敵としていた張学良が、一夜こともあろうか日本人である洪沢栄一の令息正雄氏を自宅に招いて歓待したことがある。その理由を張学良は概略次のように説明したという。「自分は若いころから日本に留学したりして多くの日本人の指導を受けた。これらの人は腹の底のどこかに必ず日本というものが潜んでいて、直接間接に日本のためにということを忘れた人は一人もなかった。ただ一人の例外が、洪沢栄一翁であった。翁は日本という立場を離れて、いつも純粹に私の立場に立って判断し、人間として私の進むべき道を示しておられた。このお礼をしたいと思いながら、ついにその機会を失っているうちに、貴方が満州にこられると聞いたのでお招きした次第である。」

今では、日本とタイ（アジア）との間は、経済的にもウィンウィンの関係にあるが、日本側の官民の間で、タイ（アジア）側に記憶されている穂積五一の精神が継承されているであろうか、次第に記憶から消えてしまう恐れはないのだろうか。

（センターでは、2020 年 3 月に「日本留学生 O B から見た日本のころとその世界への役割」と言うテーマの講演会を実施します。

講師プラユーン氏の説明で、自国に工業大学まで創設してタイの産業発展の基礎を築いた元日本留学生達の活動を学び、彼らの魂を揺り動かした穂積五一の精神を知ることになりたいと考えます。）

穂積五一（1902～1982）

東京帝国大学卒、学生時代に上杉慎吉教授に師事、上杉、岸の後七生社の学生寮

「至軒寮（後の「新星学寮」）を継承、戦後アジアからの留学生を支援し、アジア留学生の父と言われた。（財）アジア学生文化協会及び（財）海外技術者研修協会の初代理事長

スポン・チャユサハキット

1966年東京大学工学部（電気）卒、大学院修士課程（電気）修了、帝人ポリエステル（タイランド）社取締役、バンコク高速道路代表取締役社長、バンコクメトロ社副会長、バンコク高速道路取締役副会長、泰日経済技術振興協会(TPA)会長、泰日工業大学理事長、日アセアン賢人グループ タイ賢人

プラユーン・シオワッタナ

1974年大阪大学大学院修士課程（電気）修了、チュラロンコーン大学工学部助教授、バンク・タイ・パブリック株式会社副頭取、タイ国立科学技術開発機構(NSTDA)副所長、泰日経済技術振興協会(TPA)では事務局長、専務理事、を経て会長、タイ日工業大学理事長のスポン・チャユサハキット氏と泰日工業大学（TNI）創設に参画、タイ国立計量研究所（NIMT）所長（現在顧問）

2. モンテ・カセム氏の活動の紹介と、お話し。

スリランカからの元日本留学生モンテ・カセム至善館大学院大学学長（元立命館アジア太平洋大学学長）は、永年日本に滞在し、世界と日本を繋ぐ色々なプロジェクトに関与されている。

その具体的な活動から、私達がこれから何をどのように為すべきかのヒントが、見えてくる。

3. その他、世界からの元日本留学生（ASCOJA）、米山奨学生OB、海外青年協力隊OBの人達からも、具体的な事例を挙げて「世界から見た日本のここらとその世界への役割について」メッセージを頂きます。（口頭及び書面で）

（2020年3月の講演会での、モンテ・カセム氏その他の方々の講演記録から、上記2、3の記述を加除訂正し完成させたいと考えます。）

II 日本のこころを育んだ源流に何があるか

1. 日本のこころの源流にあるもの

二宮尊徳※は、成田新勝寺での断食（坐禅）修行によって、利害の異なる武士も味方にする「一円観」を会得し、自分のこころの基本は「神儒仏正味一粒丸」と述べている。（二宮翁夜話）※

※ 二宮 尊徳は、江戸時代後期の経世家、農政家、思想家で、江戸末期の関東一円の多くの農村復興事業を成功させた。内村鑑三が取り上げた「代表的日本人」の5人の内の1人。

※ 二宮は自らの言葉で、「神道は開国の道であり、儒学は治国の道であり、仏教は治心の道である」とし、「高尚を尊ばず卑近をいとわず、この三道の正味ばかりを取ってと名づけた」という。即ち、神道、儒教、仏教の中から実際生活に必要な要素（正味）を取り出し、これを混和して一体の丸薬として服用すれば道が開ける。（二宮翁夜話・231 意識）

神道には共同体としての宗教（道徳）、仏教には個人としての宗教（道徳）という側面があり、儒教には政治倫理（道徳）や統治の要諦と言う側面がある。仏教では坐禅と念仏が士農工商万民に普及し、儒教では官学としての朱子学とは別に、孔孟思想（古学）と陽明学が江戸期から武士商人を中心に万民に普及した。

日本のこころは、この神・儒・仏の三つの要素の優れたところを、各人の主体的な判断で融合して形成されてきた、と見ることができる。言い換えると、日本の神道にも、儒教や仏教の要素が入り込み、日本の儒教にも神道や仏教の要素が入り込み、日本の仏教にも神道や儒教の要素が入り込み、混然一体のものとして「日本のこころ」の根幹を支えるものとなって来たと言える。日本人の大多数は、「あなたの宗教は」と聞かれれば、自分は宗教を持たない（無宗教である）が、神儒仏の良いところを取った「日本のこころ」がその代わりとなっていると答えるのが正解かもしれない。（新渡戸稲造が「武士道」と答えた真意はここにあるのではないか？）

2. あらゆる日本文化の背景にある禅のこころ

勝海舟は「幕末から明治期の混乱の世に、曲がりなりにも今日までやって来ることができたのは、ただ剣術と坐禅の二つによってだ」（氷川清話）と言う。

まずは、日本型仏教（禅）、古神道（自然観や美意識等）、日本型儒教（古学・陽明学等）が融合する日本のこころの在りかを、「禅と日本文化：鈴木大拙」から探ってみよう。

禅とは実践智を学ぶ手法、

禅と美術、

禅と武士・剣道、

禅と儒教、

禅と茶道、
禅と俳句・・・

3. 歴史上の人物から見る日本のところと禅の影響

聖徳太子の十七条の憲法は、神仏習合の大和心の出発点であると言われ、鹿島香取を出発点に、柳生新陰流、直真影流とつながる剣道の奥義には禅や神道のところが謳われ、鎌倉時代以来の士農工商の生活や文化の万般にわたって、神仏儒習合の日本のところが受け継がれてきた。禅は、北条時宗、上杉謙信、武田信玄、宮本武蔵、柳生但馬守、・・・幕末の西郷隆盛、勝海舟、山岡鉄舟等へと、今日につながる武士道精神のバックグラウンドになった。禅はそれと同時に、中世からの匠の道（彫刻、工芸、美術）や茶道、松尾芭蕉の俳句を始めとする文学の隆盛、二宮尊徳らの農業復興運動、石田梅岩らの商人道（心学）の発達に大きな影響をもたらした。そして、モノづくりの工業や三方よし精神の商業、人を大切にする日本型経営に至るまで、今日の日本の産業・生活・文化を支える力の源泉になっている。

(参考)

1. 禅のエッセンスは「小我」と「大我（真我）」＝人類普遍性を持つ真理

禅のころは、「不立文字」とされ、言語や論理によっては把握し難い（体験による把握が不可欠の）ところにあると言われるが、唯識（※）の哲学で見ると概念的に判りやすいかもしれない。

※ 唯識は、4世紀に北インドに生まれた無著と世親の兄弟が大成させた、大乘仏教の根幹をなす思想の一つ。唯識では、人間の意識を、意識の世界（眼、耳、鼻、舌、身の五感と意識《頭脳による論理的理解》の六識）と無意識の世界（末那識と阿頼耶識の二識）の八識に分けているが、無意識の世界の二つの関係を次のように解説する。末那識は、人間の生存本能、自我意識からくる自己保存、自己防衛のころであり、競争、戦争につながる。阿頼耶識は、過去の祖先の行動・経験が個々の要素（種子）として記憶されている深層のころであり、大きな方向性に於いて人間をより良き方向に向かわせる、慈悲、友愛、共生につながる希望の無意識である。小我と大我（真我）という言葉があるが、末那識は小我の領域の無意識であり、阿頼耶識は大我の領域のそれであるといえる。坐禅の無意識の状態は、究極的にはこの阿頼耶識に達するものと考えて良い。

禅でいう「大我」の世界が、阿頼耶識に対応する世界だとすれば、それは西欧哲学とも相関する要素がある。

スイスの心理学者カール・グスタフ・ユングは、人間の無意識には、「個人的無意識」と、「集合的（普遍的）無意識」の二つがあるとし、後者は「人類の歴史が眠る宝庫」のようなものであると例えており、いわば阿頼耶識に相当するものと考えられる。

鈴木大拙はユングの親しい友人であり、またエマヌエル・スヴェーデンボリやハイデッガーとも個人的に交流があったという。(Wikipedia)

キリスト教やイスラム教が一神教であるのに対し、東洋の宗教は多神教であると区別することも可能だが、キリストやマホメッドの生誕以前の段階では、西洋にもアニミズム的、多神教的なベースもあり、アリストテレスからトマス・アクイナスにつながる「霊性」の捉え方は、仏教や儒教（孔孟思想）のそれと共通する部分があり、普遍的真理は東西世界でも深くつながっていると見ることができる。

事実、アレクサンダー大王の東征に見られる文化の東西交流が、ミリンダ王との対話に繋がり、東西思想は相互に影響し合っ「慈悲」とか「大我（真我※）」という人類共通の普遍的価値を共に支えるものとなっている部分もあるのではないか。

岡潔氏は、教育における自我形成の過程で、小我を超えた「真我」を発現させることを訴えた。(1968年当時の坂田文部大臣への提言)

宗教を超えた禅の普遍性については、例えば、クラウス・リーゼンフーバー神父（上智大学名誉教授）による坐禅会の開催など、現在でも多くのカソリック教徒の信者が坐禅を行っていることから立証される。

「慈悲」や「大我」の世界に立つ日本のところは、人類的普遍性を持つものであり、私たちは日本（人）を離れるところに「日本のところ」の真髓があるという真理に気付くことができる。

2. 禅の歴史

禅の歴史（インド→中国→日本）、
行法、

3. 日常の効用

坐禅の効用ー1 自己のメンタルヘルスの改善・向上

坐禅の効用ー2 イノベーティブな発想、新しい価値の創造、実践智の獲得、組織・社会運営の円滑化（ウィンウィンの道をすすむ＝活人剣）、新しい世界観、宇宙観の獲得

4. 在家禅の重要性

僧だけでなく日常生活で日々課題に取り組んでいる生活者、社会人こそが主体的に坐禅に取り組むことが重要、師道無難、正受老人、鈴木正三、石田梅岩、松尾芭蕉

Ⅲ 地球環境の保全・人類の共生を支える日本のこころ

1. 地球的規模あるいは地球的視野にたった環境問題としては、例えば(1)地球温暖化、(2)オゾン層の破壊、(3)熱帯林の減少、(4)開発途上国の公害、(5)酸性雨、(6)砂漠化、(7)生物多様性の減少、(8)海洋汚染、(9)有害廃棄物の越境移動等の課題が人類の将来にとって大きな脅威となるとされている。(一般財団法人環境イノベーション情報機構)

課題ごとの対症療法的な施策を超えて、経済成長か人類の生存環境維持か、技術の高度化か人間の生命と尊厳の保持か、という大きな価値観の平衡感覚を研ぎ澄ませ、大所高所からの適正な判断と大きな舵取りが期待される事態となって来ている。核兵器・宇宙兵器・AI兵器(ロボット兵器)の制限・廃止、平和利用の核開発、宇宙開発の管理の問題等にも、日本人の生命観(日本のこころ)は、大きな発言を求められていると言えよう。

2. 山中伸弥教授は、NHKの番組で遺伝子工学(ゲノム編集)が進むと、人間の生命に科学が大きく関与することになり、倫理的な視点からの自己規制がないと「人類が減じる可能性がある」と発言し、人々を驚かせた。昨年、中国では若い科学者が世界で初めてゲノムを編集した赤ちゃんを作り出したと主張し、世界から非難が舞い上がっている。人類の生命を作り出す生殖技術に科学がどこまで関与すべきかは、真剣に監視されなければならないのではないのか。地球環境問題は帰るところ生命のあり方の問題であり、日本のこころの文化はこれに如何対処すべきと考えたらよいか。
3. 一方男女の社会的格差を解消するジェンダーの課題があるが、その本質は社会的差別の問題を超えて、人間の子孫をどのように維持し発展させていくかという地球環境問題に位置づけられるという見方もある。明治以降は別として、日本はどちらかと言うと古代から父系社会というより母系(双系)社会的要素が強く、それが生殖・育児を通じて生命を繋ぐシステムの基本にあったという見方がある。生命を繋ぐという点に着目すれば、ジェンダー論でも日本の社会システムは今後地球的な意味を持ってくると言えよう。
4. 世界の強国が先住民族を追いやって征服し、最近ではグローバリズムで世界がモノカルチャー化していく流れの中で、世界の先住民族を調査した東工大月尾嘉男名誉

教授は、進歩主義的世界観が次の人類の危機を招来する恐れがあるとして、人類は先住民族の智慧に学べと警告している。

- ① 土地の私有という失敗＝共有こそ循環社会の決め手（酋長シアトルの言葉）
- ② 時間に縛られる苦悩＝イヌイトの時間に縛られない狩り
- ③ 将来を考えない人類＝バックキャストによる子孫への貢献（7代先の子孫を考え現在を計画するイロコイ族）
- ④ 万物の霊長という驕り＝自然崇拜と動物・生物との共生の智慧
- ⑤ 進歩の代償である精神的退化（強欲）＝（アマゾン先住民族のアユトン・グレナックの言葉）人間は鳥のように静かに飛び去っていくことができる。通り過ぎるだけなのに、何か記念碑を残そうとする人は自分に自信がないだけ。

以上（「先住民族の叢智：月尾嘉男・遊行社刊」より）

グローバリズムが極端に進む中では、将来日本民族自体も「先住民族」として扱われる恐れがあるのかも知れない。世界中の先住民族の智慧は、人類共通の叢智かも知れず、地球の環境問題はここから解決していくべきものと思われる。

神道や修験道などの文化的蓄積にみられる自然と共生していく生命的知性に着目すれば、日本のこころにある自然感や美意識は宗教という言葉で括れない。その意味で、地球環境の保全こそ、日本の世界史的使命と考えるべきではないか。

5. 神道については諸説があるが、ここでは狭い意味での宗教と見ず、広く日本人の心性の拠り所、道徳規範の源泉として見て行く。逆に言うと、世界の宗教と対立せず、包み込むように受容できる宗教観（アインシュタインの言う宗教性）だとも言える。（「日本の宗教」田中英道著・30頁）

神道には経典や教義がない。恵まれた自然風土から自然信仰が生まれ、八百万の神といわれるように、万物に神が宿るという思想が定着して行った。

日本では昔から人々は、神に感謝し、大自然に感謝し、先祖に感謝し、周囲に感謝し、有難い、おかげさまでという思いで生活している。したがって日本では何時の時代でも自然との調和が図られてきた。

日本人は「お天道様はすべてお見通し」と言うが、「天」は宇宙をさし、「自然」をさす。神道の祭りは、自然や先祖に対する感謝の念を表明する儀式と言える。また、神道は神の前で祝詞をとるが、祝詞とは神をたたえ、神即ち自然に感謝する言葉である。

日本人の清潔好きは世界的に知られているが、古来「神々は清浄を好み、清浄なところにまします」といい、日本人は心身の清浄と環境の清浄を尊び、汚れや、汚

いことを好まず、汚れは穢れ、穢れは気枯れであり、人の活力を低下させると考える。

これからの地球環境問題への対応において、この自然道とも言うべき神道の考えは大きな働きをしてくれるのではないか。※

同時に、神道の宗教観は、世界の宗教対立を包摂する力を持ち、世界平和への政治的なエネルギーとなるのではないか。

※日本の神道と地球環境問題

神道は自然道であり、自然が神である。一神教と異なり、神道は超越神がはじめに存在して、これが自然をつくったとは考えない。自然が始めから存在し、自然そのものが神である。そして自然は霊的存在である。神道は宇宙のあらゆる存在に霊性を認める。霊的存在ということは、生命（いのち）をもつということである。

神道の世界観は、自然＝神＝霊的存在＝生命をもつ存在。こうした世界観を一神教の学者はアニミズムと言って、未発達の原始宗教とするが、実は一神教発生前、世界人類はほぼ共通してこうした世界観をもっていた。一神教の世界観が非常に特殊であり、神道的世界観が人類のより普遍的な世界観であるとする考えは十分成立する。

一神教においては、自然も人間も超越神によってつくられたもの（つまり被造物）で、自然はモノであり霊（生命）をもたないが、人間は神より生命を吹き込まれたがゆえ霊をもつ。ゆえに、人間は自然の一部ではなく、自然の上位にある。一神教における自然、神、人間の序列は、神—人間—自然で、自然は人間の下位にあり、神のステュアートとしての人間の支配をうける。自然の中には、無生物のほか、動植物等すべての生き物が含まれる。ゆえに一神教では、人間と動植物は決定的に異なる。

これに対し、神道では人間は自然から生まれ、自然の一部である。自然の一部である動植物と全く同じ生命をもつ霊的存在である。人間と他の生き物との間に基本的に違いはない。さらに神道では、岩、山、川、海といった無生物も霊的存在と考える。

神道では、自然が神であるから、自然を畏敬し、人間は自然の一部であるゆえ、必然的に自然と共生するといった感覚を生む。こうした神道の自然観は、自然はモノに過ぎず、人間は自然と異なり、自然の上位にあるとする一神教の世界観よりも、地球環境問題を考えるとき、よりふさわしい世界観だと考えられるのではないか。

田中英道著『日本の宗教 本当は何がすごいのか』

IV 孔孟思想・古学と陽明学からも生まれた日本のこころ（日本儒教について）

日本で熟成した儒教は、堅苦しい倫理道德や統治原理（法家の思想）を超えた、気（浩然の気・孟子）や祖先崇拜など、生活文化に根差した日本人の「こころ」の本質にかかわるものである。

儒教については、孔子（前 551～479）が「孝」、「仁」、「信」など家族や近親者を中心とした徳目を思想として打ちだし、性善説の孟子や性悪説の荀子に受け継がれた。東アジアの歴史の流れの中で、秦帝国は荀子の流れを継ぐ法家の思想（道德の一部である法（刑）即ち統治ルールを重視する）を採用し、中央集権（科挙官僚による支配）を貫徹した。中国では、時代を経て紆余曲折はあったが、その後の朱子学に繋がり、清王朝や韓国の儒教思想の根幹をなして来たと言える。

朱子学は、日本に伝わり湯島聖堂（林羅山）、昌平黉を経て明治政府の時代には官学を中心にいった。一方で、孔子や孟子の思想は、杓子定規の朱子学とは異なり、ルールの前に宗教・哲学・倫理の要素を色濃くもった考え方で、日本に於いては、伊藤仁斎に始まる古学の流れや陽明学として深められ、江戸時代後期から幕末にかけて、多くの儒者を打ち出した。この古学や陽明学は、朱子学が「理」や「知」をまず掲げ演繹的に道德を展開するアプローチを採ったのに対し、「気」や「行」を重んじ、帰納的な実践智の確立を重視した。後者の考え方は、禅や神道のこころとも合流し、私塾や手小屋などを通じて日本の士農工商の各界に伝播し、神・仏・儒が融合した日本人のこころの形成につながったと考えられる。

儒教の家族主義・一族主義、祖先崇拜（靈魂と魂魄）は、日本に於いて、神道や仏教（日本に伝来した中国の仏教は既に儒教の影響下で変質し、インド仏教とは異なったものになっていた）と習合し、独自の精神文化が形成されて来た。

以上のように、日本には、幕府の藩校を中心とする朱子学もあったが、一般には堅苦しい朱子学よりも人間のこころの自由な働き（王陽明の「心即理」）を重視する陽明学が支持された。朱子学と陽明学は、概念的には、論理性と直感的本質把握、知性と感性、読書と坐禅、公と私等々、それぞれ重視するポイントが正反対である。

（参考）代表的な日本の陽明学者

中江藤樹（内村鑑三の代表的日本人の1人）

佐藤一斎

佐久間象山

山田方谷

熊沢蕃山、等についての解説

陽明学は、幕末では大塩平八郎、吉田松陰、高杉晋作、西郷隆盛、河井継之助など討幕派・反政府派の行動原理となり、明治に入ってから反政府の自由民権派の流れに繋がっ

た。（「大人のための儒教塾：加地伸行・中公新書」等より）

なお、幕末の古学から水戸学へのつながりは、伊藤仁斎※、荻生徂徠、会沢正志斎を経て、日本型プラグマティズムを重視した福沢諭吉の実学及んでいるという見方もある。

「日本思想史新論：中野剛志・幻冬舎刊」

伊藤仁斎は、本場の中国（および朝鮮）において儒教の主流となった朱子学を否定し、孔子・孟子の教えに帰る「古義学」を提唱した。「古義学」は何より「孔孟の本旨」を明らかにしようとするものである。仁斎は、宋の時代に朱子によって大成された宋学（＝朱子学）は高遠で、思弁的な儒教の体系であるが、孔子・孟子の本来の意思、教説からはずれた邪説であるとした。

仁斎は『論語』を「最上至極宇宙第一の書」という。『論語』は孔子の卑近な日常の言行録であるが、仁斎は、日常の卑近で平明な教えこそ真実の教えであり、卑近な日常における実践こそが聖人の道であるという。仁斎は、『論語』を正しく読むことは、孔子の示した実践の英知を読み手が共鳴共感するような体験をすることであると説く。

朱子学は、世界の普遍的な原理、宇宙万物の存在根拠として「理」を立て、「理」は客観的な自然法則であるだけでなく、人間の倫理的な当為法則も普遍的な「理」であるとするが、仁斎はこのような「理」を認めない。日常の経験世界を超越したところに「理」の支配する高邁な真実の世界があるとする朱子学の大系を仁斎は虚妄であるとし、こうした形而上学の体系は道德の荒廃を招くという。

朱子学の「理」は人間にも内在し（これを「性」という）、人間の内奥に善の原型として潜むという。人間の内奥にあるとされる「理」を実現する実践は、必然的に公式主義、嚴格主義、教条主義、原理主義となり、「理」は「残忍酷薄」を生むと仁斎は批判する。こうした批判は、若い頃朱子学に傾倒した仁斎がこれを実践して得られた体験的結論であった。

仁斎は古義学で「生の哲学」を説いた。仁斎は「理」ではなく、「仁」を道の基本におき、「仁」は「愛」以外の何者でもないとする。仁斎の思想の根底にあるのは、人間をあくまで「活物」とみる人間観である。仁斎は朱子学の「理」を「死物の条理」とし、あくまで人間を含めた宇宙を「活物」あるいは「運動体」とみる。仁斎は、存在とは運動であり、成長であり、生命であるという。運動するもののみが存在であって、静止は存在でない（「理」は静止であり、存在の原理たり得ない）。仁斎は、「生々の天地観」という新鮮な自然観を近世社会に提示した。

人倫日用の立場を重視し、平明な実践の学を提唱する仁斎は日本の儒学に新しい展開を示した。それは儒教の日本における深化であった。倫理学者相良亨は、仁斎の思想を、日本人の伝統的な倫理感覚を踏まえつつ、儒教的教養によってこれを高めたものと言う。中野剛志は、仁斎の日常生活における実践を尊重する「プラグマティズム」こそ、仁斎の思想の重要な到達点であるとする。参考資料 吉川幸次郎「仁斎東涯学案」日本思想史大系『伊藤仁斎伊藤東涯』相良亨『伊藤仁斎』ペリカン社

VI 真のサムライとは？（下記内容で準備中）

サムライジャパンの活躍？、しかし・・・

サムライの精神、武士道精神は、戦いの荒ぶるころではなく、全く逆の静かな平常心、相手を尊重し、思いやるころ・・・

ガッツポーズはなじまない

勝敗を離れるころ

相手を思いやるころ

剣と禅

剣道の真剣勝負には、腕や力だけでは対応できない。

正しいころを保つことがポイントである。

流派にもよるが、奥義に示されているのは、神道の清明なころ、禅の拘りのない自由なころ、大きなころである。

柳生新陰流の奥義書

不動智神妙録（沢庵禅師が柳生但馬守に送った極意）

宮本武蔵

山岡鉄舟

大森曹玄

弓と禅

オイゲンヘリゲル

武士道とは何か

その表れた形

映画ラストサムライ

小平奈緒子の敗者への思いやりと乃木将軍の水市営の会見

黒田清隆と庄内藩

連合艦隊司令長官・伊東祐亨（すけゆき）は、敗将である清国北洋艦隊提督・丁汝昌（ていじょしょう）に対して、武士道精神に則った丁重な計らいをし、中国将兵を感激させた。

佐久間艇長

武士道には美意識（嗜み、潔さ、等）もある。

たとえば、和歌や漢詩の創作、辞世の句、作法

八幡太郎義家と安倍貞任とのやり取り（衣の盾はほころびにけり）

太田道灌（七重八重 花は咲けども 山吹の 実（蓑）の一つだになきぞ悲しき）

XII グローバル時代における日本語の大切さ

日本のこころの根源には国語がある。自国語（漢字かな交じり文）を失ってはノーベル賞も出ず日本に未来はない。国語を失った国（アラビア語と中東諸国、タガログ語とフィリピン、漢字と韓国）の悲劇、日本語喪失の恐れは？

（施光恒）

現在、英語教育の強化の方針が叫ばれ、国の教育政策の大きな柱として推進されている。政策当局者の中には「グローバリゼーションの時代、経済界の要求の重点は英語教育の強化にある」と考える向きもあるようだが、しかし、一部のグローバル企業はさておき、多くの国内企業では採用する新人の国語力の不足が著しいため、将来の企業経営に大きな危惧を感じている状況で、幼児教育・学校教育段階での国語教育の強化への期待と懇請の声一色と言っても過言ではない。

その一部、

- (1) 国家の浮沈は小学校の国語にかかっている。英語教育強化は国民のエネルギーを空費させる。英語教育論を退治しないと国語改革はできない。国語の基礎は、文法ではなく漢字である。国語力の低下は、知的活動能力の低下、論理的思考力の低下、情緒の低下、祖国愛の低下を同時に引き起こしている。国語力の低下は確実に国を滅ぼす。英語よりも国語教育の重視が先だ。（藤原正彦）
- (2) 現在のような教育の英語化が進むと、高等教育を受けてエリート的、指導的立場づくには英語は必須となる。一国の中でエリート層と一般の人たち間で使う言語が違っていたら、意思疎通が十分できず、世論がきちんと形成されない。その結果は民主主義を危うくし、社会の分断を招く。将来的には、日本語が知的なことを論じたり、研究したりする言語ではなくなってしまう。フィリピンは英語で現地語が死んだ。人間の創造性は、既存のものへの違和感や、ひらめきから出発する。そうしたことを言語化するのに強いのは母語だ。英語重視の改革は、日本人の創造性（イノベーションへの資質）を失わせる懸念がある。（施光恒）
- (3) 日本語の劣化が進んでいる。かつて古代ギリシャ文明をヨーロッパに中継ぎした世界四大文章語の一つであったアラビア語がその後の英仏植民地支配を経て劣化したのと同じ轍を踏みつつある。英語による世界のモノカルチャー化が進む中で、日本語の質の低下が心配だ。（愛甲次郎）
- (4) 漢字仮名交じりの日本語には高い知的伝達能力がある。自身の経験でも、ロシア文学を日本語の翻訳書で読んだ場合は、現地の人が現地語で読んだ場合に比べ2倍ほど早く読める。（和田裕）
- (5) いまはスマホで通訳不要の時代になった。自分の長い海外経験から、英語は方便で、大事なものは英語ではなく、日本語であると考えている。仕事ができる者は英語が使える

る者ではなく、きちんと日本語で考える能力を持った者だ。信頼する企業経営者も、海外で勤務する人間の選抜基準は、日本語で仕事をしっかりしている者だと言う。(高坂節三)

- (6) 日本語の破壊が、職人の文化、モノづくりの現場を破壊している。最近の新人は自分の頭で整理してモノを考えたことが殆ど無いので、満足に自己紹介もできない。採用して企業内で教育を施す余地がない。将来の日本産業の競争力を考えると、これは大変な事態だ。(伴紀子)
- (7) 西欧では、知的概念を凝縮した抽象語としてラテン語やギリシャ語がつかわれる。日本人にとっては概念を集約する表意文字の漢字が大切で、漢字仮名交じり文は国力の源である。
- (8) サイエンスの分野の術語は全て適切な漢字（日本語）に翻訳すべきだ。そうしないと知識のすそ野が広がらない。中国は日本の明治時代のように、最近はどんどん英語を漢字（繁体字）に翻訳している。中国の「英漢科学技術語辞典」は、英語に対応する用語は全て漢字（繁体字）を充てている。科学技術に興味をもつ膨大な若者層が育つ背景となっている。明治の日本人は、水素、酸素など、全て外来語を漢字に翻訳し、全国民が理解できる環境をつくった。今中国が将来を見据え懸命に努力しており、日本の教育・研究界は危機感を抱くべきではないか。専門家は英語で問題ないが日中で国民の科学力に大きな差が出る恐れが大きい。(野依良治)
- (9) AI時代では新しい価値を生み出すイノベーションが求められるが、そこでは論理や知識だけでなく、ひらめきをもたらす情緒や感性、直観力が重要とされる。日本語で書かれた文学の重要性もまた再認識されなければならない。

VIII 世界に求められる日本型リベラルアーツ

世界の政治、経済、社会の激動と混迷の中で、欧米各国の若者は、今ギリシャなどの古典哲学に戻り、民主主義や政治における正義を本格的に学びなおし始めている。一方、日本の若い世代の古典離れは日本の未来に大きな不安をもたらしており、日本においてもこれからの日本及び世界の新しいビジョンづくりに不可欠のリベラルアーツ教育の再興が必要ではないか。

その場合、日本では歴史的に、西洋古典と東洋古典（日本思想）の交流から和漢洋のバランスのとれた教養が形成され、日本人の精神構造が育まれてきた面があり、この人類の

共通の精神遺産である「日本のこころ」の基盤を支える日本的リベラルアーツの研究・教育拠点の再構築が求められるのではないか。

AIの機能が拡大深化する今日、若者のみならず、中高年において、自由と幸福を志向する人間に相応しい教養の在り方が追求され、世界の先進国では高等教育機関がその成果をめぐって競争している。そのなかで、岡山大学荒木勝名誉教授（西洋政治思想史、ギリシャ哲学）が、2018年10月に「東京逍遥塾」を開設し、日本的リベラルアーツの研究・教育拠点の再構築の試みをスタートされた。これまでの東京逍遥塾の成果を踏まえ、日本の知的伝統を生かした今後の日本型リベラル・アーツのありかたについて検討して見る必要がある。その資料で示された下記の今後の展望をどのように考えるべきであろうか。

今後の展望

- ・ 西洋との本格的な対話・アリストテレス+儒・仏・神
 近代西洋との対話でなく、古代西洋・ギリシャとの対話
- ・ 東洋的なアリストテレス
 アリストテレス哲学の中に、東洋哲学を見ること
- ・ アリストテレスと孔子・ブッダとの対話【東北師範大学の校門の像】
 中国の大学は、紀元前のアリストテレスと孔子の思想的交流にまで遡り、独自の政治哲学を求める時代に入っている
- ・ 鍵のない社会か・AI監視網の中の社会か
 西洋社会が畏敬する東洋社会へ、善き市民から善き人・宜なる人へ
 中国や日本は、それぞれどのようなビジョン、展望を示しうるか

如何に習近平が、中国の夢として、一帯一路や孔子・儒教を語り、「人類運命共同体」構想を語っても、私たちには直ぐに納得できないものがある。

長い戦乱と自然災害の歴史を経て練り上げてきた日本のこころ、具体的には禅、仏教、儒教、神道なども混然一体となった「日本のこころ」（そして、それは古代以来、ギリシャから東洋までの人類共通の智慧をベースとした普遍性をもったもの）を学び直し、そこを立脚点とする日本の夢＝「人類社会のための新たな希望のビジョン」を再構築し、それを世界に、静かに発信していく時期に来ているのではないか。

西田幾多郎や中村元を生んだ東洋哲学の蓄積一つとって見ても、その後の日本の高等教育・研究機関に如何にそれらが継承されているかは心細い限りである。

日本としては、AI時代への対応に理系学問の研究・教育の重視が進んでいるが、その陰で文系学問が軽視されることがあってはならないのでは？

古典哲学をはじめ、文学から音楽など、いかなる総合的な日本型リベラルアーツ科目の研究・教育の再興が求められるであろうか？